

学会だより

JDDW2018 第22回日本肝臓学会大会

松崎 靖司

(東京医科大学茨城医療センター消化器内科)

平成最後のJDDW2018における第22回日本肝臓学会大会は山梨大学第一内科の榎本信幸会長のもと、2018年11月1日、2日に神戸国際会議場、ポートピアホテル、神戸国際展示場にて開催された。

今回のテーマはシンプルに「肝臓病学の諸問題」と設定された。「ウイルス肝炎の治療が格段の進歩を遂げたなかでより幅広い課題について活発な議論の場になれば」と会長は記している。確かに98%近くC型肝炎患者は治るという時代を迎え、新たな課題を明確にしていかなければならない時代となった。榎本先生のその意気込みが感じられる2日間であった。

「先生、英語ですべてやりますから」と開催の前の週に私は会長から言われた。そして「会前夜の拡大プログラム委員会(懇親会)も英語で挨拶をしますから、先生もお願いします」と言われた。小職、困ったなと正直思ったことは否めない。さて、いざ開宴となると、榎本先生自ら司会をして英語で懇親会を始めるではないか。本来、開催を目前にしてご逝去された坂本 穰先生がすべて取り仕切ることとなっていたことは容易に想像がつく。坂本先生への鎮魂の黙祷から開始となった。始まると榎本先生は早口で朗々と英語で挨拶を颯爽とされ、進行されていった。流石、世界を目指す肝臓学会を作るといふ気概がにじみ出るものであった。最後までほぼ90%英語で進行したことは驚きに堪えない。見事であった。

本会においては、JDDWのなかで肝臓学会の12の主題セッションのうちの6つのセッションが英語で行われた。5名の海外招待者(R. T. Chung, J.-M. Pawlotsky, J.-H. Kao, K.-H. Han, H. L. Y. Chan; アメリカ, ヨーロッパ, 台湾, 韓国, 香港の各肝臓学会の会長)の先生方には招待講演、国際シンポジウムの発表だけではなく主題セッションでも座長をお願いし、発表者は「これらの世界を代表する top hepatolo-

gist の前で発表しコメントをいただけるまたとないチャンスであるから、英語で発表するように」と、と会長から勧められた。実際これらの先生に座長をしてもらえるのはAASLD, EASL や APASL の plenary session にでも通らないかぎり不可能であることは事実である。結果、なんと約80%の演者(約60演題中50演題)が自発的に英語で発表された。新しい肝臓学会の時代の幕開けとなったのではないだろうか。

特別講演としては日本の著名な4名の教授から、肝硬変、自己免疫性肝疾患、再生医療のお話がきけた。主題演題263題、特別、招待講演9題、デジタルポスター246題、International Poster Session 121題を合計し計639題と、多くの演題の発表の場となった。今回の肝臓学会の主題セッションの半分は実質的に英語のセッションとなったという驚くべき結果となった。6つの主題セッションの演者となった次世代の肝臓学会を背負う会員は見事に期待に応えたことになろう。

以上のように第22回日本肝臓学会大会は盛会裏に終了した。2019年の第23回大会は私自身が会長をさせていただく。「ポストHCV時代の肝臓病学の展開～原点を考えよう肝臓病学～」というテーマとさせていただいた。今後HCV研究の主軸から肝臓病学の底辺を見る時代となろうかと思う。肝臓病学の原点ともいえる、代謝学、生化学、病理学、細胞生物学、分子生物学など各方面からの研究アプローチを語り合い、新しい時代への導入ができればと思っている。しかし、懇親会は従来の conservative な形になることをお詫びする次第である。

松崎靖司先生は平成30年12月9日に急逝されましたことを謹んでご報告申し上げます。

(東京医科大学茨城医療センター消化器内科

池上 正)